

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 近代日本の宗教学思想と国家 ―「新宗教」理想と国民教育の交錯―

氏名 前川理子

本論文は、宗教学の学問思想が近代日本にどのように形成され、また戦前戦中期の国家と教育をめぐる課題にどう向かいあったかについて明らかにする試みである。国家神道は宗教に非ずとされ、教育勅語を柱にする公教育が宗教との分離を大原則としたこの間、宗教学とこれに携わる人々（必ずしも大学アカデミズムに籍をおく人に限定しない）は、学問的知見を規範的に応用して宗教的国家論を展開し、あるいは国民教育に宗教的要素を加味すべきと論じて社会・国家に働きかけていった事実がある。だがこれまでは学説史的研究や宗教学者の人物研究はあっても、近代日本の国家―宗教関係あるいは国民教育史の流れに沿って、宗教学の学問思想を上級の観点から吟味する試みはほとんど行われてこなかった。

そこで本論文では国家神道論や天皇制教育史における諸研究を手がかりに、近代日本の宗教学の学問思想の内容と特徴をふまえて、明治半ばに理想的「新宗教」の登場を期する一種の宗教学的な思想運動に発展されたそれが、近代日本の国民教育や国体をめぐる問題と交錯しながらどう展開したのかを通史的に探ることとし、以下の構成をもって進めた。

本論文は、序章にあたる第1章、第2章～第4章からなる第Ⅰ部と第5章～第6章からなる第Ⅱ部、そして終章をあわせた全7章により構成される。序章では上述の問題関心を述べるとともに先行研究を一瞥し、本論文の目的と課題、視点と方法、具体的な課題の設定をおこなった。

第Ⅰ部「宗教学思想と国民教育への展開」では、前史として明治20年代以前の宗教界に

現れた「新主義」と呼ばれた新動向を一瞥した上で、明治 30 年代に始動する宗教学の理論・思考枠組をひろく宗教学思想ととらえてその内容を明らかにし、それが社会、国家への関心を広げて宗教論・教育教化論的に展開する面をとりあげた。合理的倫理的社会的および脱宗派宗教＝通宗教的真理への志向に特徴づけられる斯学の理想的宗教観（「新宗教論と呼ばれた）は、宗教でない「宗教的なもの」なる論理をもって学的ならびに倫理的方面に展開され（丁西倫理会、帰一協会その他の活動）、また各種の修養運動や文学的宗教的諸現象として表出していった（第 3 章）。

この間具体的に行われた主張の例としては、先駆的論者として井上哲次郎（第 2 章）および姉崎正治、加藤玄智、大川周明らの宗教論国家論をとりあげた（第 3 章～第 4 章）。その共通点は、各派伝統の棄却や祖師論の転回を含みつつ、敬虔なる「信念」や「宗教的情操」に通宗教性（宗教の本質）をみる人格中心主義の代替的宗教観をうちだし、宗教的英雄偉人の感化力を助けに各人が直接神秘（大我、神、真如）につながる倫理的個人宗教の傾向をもって理想化する点、またこれを現実の国家体制や教育体制に調和的に重ね合わせようと努める点である。それらは政府当局の家族国家論－忠孝一本論に拠った国家観尊皇観、報本反始の神道的国民道徳を不足とする人々にアピールするいっぽう、比較の対象としてとりあげた上杉慎吉の皇道論などに比べてみれば、その主張の個々には普遍への志向ぬきがたく天皇絶対主義に抵触する部分があったり、普遍宗教の理想と国体や国民道徳の特殊的要請との間に無視しえない不整合を生じるなどの矛盾も目立った。

第 II 部「体制の国家宗教論と宗教学思想」では、国家と宗教をめぐる政府当局の構想に宗教学思想がどのような交渉をもったかを探った。まず宗教(的)教育論としてその応用実践を求める動きに対し、どこまでそれが国家の意向に接近することになったのかを明らかにすべく、文部省等の各種審議会において文教政策上に彼らの主張がどう提案され、扱われたかを分析した（5 章）。大正昭和に設置された臨時教育会議、宗教教育協議会、教学刷新評議会、教育審議会（姉崎に近い成瀬仁蔵、同僚の高楠順次郎、東大宗教学出身の矢吹慶喜、椎尾弁匡ら学者のほか同志的官僚・政治家らが委員を務めた）を具体的検討対象とした。彼らは、通宗教的新宗教論ないし感化的宗教情操論を根拠に、国内三教による教育貢献の可能性を説いて既成宗教の公教育参入を後押しした一方、天皇機関説事件後の国体明徴問題の急浮上による時局転換期には、国体観念の宗教化・天皇「本尊」教が全面展開されるのに同調した。

彼らの宗教教育論は全体的国家宗教との関係において曖昧さを免れず、その詰め甘さが露呈して国体宗教論に押し切られてしまうが、その経緯は宗教教育協議会以降の審議会でのやりとりに鮮明であった。臨時教育会議で成瀬が主張したような人道的宗教性・自律

的な宗教的人格論を謳いあげる大正期の宗教教育論は、そののち宗教教育協議会で矢吹が述べたような凡愚的他力の信仰を主にする宗教教育論に、宗教的情操概念は没人格化した内容解釈にとって代わり、集団主義に埋没する臣民道の主張に合するものになった。三教のほとんどもこれ以降は国体宗教に順応して「皇国宗教」の一翼として貢献する道を進んだのである。

この前後には同じ変化の波を井上、加藤、大川の国体論・国家宗教論も受けた。これが民間右翼の糾弾の対象にされていくことをみるとともに、その背景となった教育原理の時代的再編について、国家教学の正統を示した『国体の本義』とこれに続く国民学校令に至るまでの流れを分析した（第6章）。国家や国体を戴きつつも、起点において普遍宗教の理想や英雄論的人格主義を汲み、自律と靈性を重んじる人格的修養主義の唱道を中身としていた彼らの日本人論国家論は、個人主義や自由主義が反国体視されていく教学刷新の時代には国体主義として徹底を欠くとみなされ、修正を余儀なくされていったのである。

終章では本論文の成果を確認するとともに、宗教性の概念と近代日本の宗教学をめぐる一考察を加えた。新渡戸稲造の宗教的修養論や姉崎正治の靈性的征戦論にふれつつ、明治後期以降の修養的宗教論の国家癒着を論じ、敬虔性や「至誠」の信念に宗教的内実を縮減する抽象化空洞化された宗教性の論理は容易に、その超宗教性を没超越性に反転させ得たことを述べた。

以上において独自に得た見解の一つはまず、宗教学的理想に牽引された宗教(的)教育論が、体制的国体観の推移するに従い扱いを異にされる大きな流れを明らかにしたことである。明治末年の三教会同から昭和10年の宗教教育協議会—文部次官通牒発令に至るまでの既存宗教を中心とする宗教教育推進運動と、その後の現人神天皇崇拜の強化に特徴づけられる国体的宗教教育との関係は従来、次官通牒の両義性ともあいまって不分明であったが、これを解するには大正以降の体制思想の変転に連動して前者の宗教教育論の中身が動揺する過程に注目する必要がある。

仏教キリスト教を用いる宗教教育論が国体観念を補強するものとして支持を得、普遍的信念論が国体の枠内で主張されるという一見不可解な現象がおきたのは、大正デモクラシー下に国体論や教育勅語が普遍的国際的な解釈を付された体制思想の弛緩期にあつてこそであった。共産主義流入の阻止という消極的理由ながら為政者側もこれに理解を示す。だが昭和に入つての満州事変の勃発や国際連盟脱退などに伴う日本の孤立化を背景に、体制思想が特殊的国体観念の公然化に舵を切り、国体論的一元化が教育勅語にも憲法解釈にも進行する時代を迎えて、宗教教育導入論—次官通牒は有名無実化され、あるいは言及され

るときには逆に天皇教推進の根拠として転用されることになった。

宗教的情操概念の内容変遷をめぐって上述したように、この間、宗教教育論に与する宗教(学)者らの方でも、国家－宗教関係を前進させるためには当初の主張を翻してでも時代社会に順応妥協する一面をみせたことが注目された。ただし他方に宗教学思想は、大川やその他のケースにもみられたように、宗教の党派性独善性をしりぞけ宗教的普遍性を重んじる批判精神の働くときには、絶対的日本主義の台頭や埋没主義への躊躇を育むことがあったことも知った。かく本論文では、国家国体をめぐる宗教学思想の社会・国家との関わり方の複層的なあり方を、時代背景や個々の主張に即してその可能性と限界につき具体的に明らかにしたことがもう一つの特徴であった。

宗教学思想を担った人々は世論への影響活動を積極的になし、諸教に通ずる宗教的真理とか人間本性に根づいた宗教的欲求の実現といった斯学の根本思想をアカデミズムの外にも拡大し、文教政策決定過程にも関わって公教育における宗教教育推進運動に切り結んでいった。だがその試金石となった昭和の国体明徴運動下には、「宗教的なもの」に期待される内容は為政者の新しく示した国体神学の要請に沿って一転したにもかかわらず、時局迎動的な応用性を発揮するほうに向かった。「宗教性非宗教」論は「神社非宗教」論や「国家神道非宗教」論に重ねられていった。

彼らの依拠した宗教性の概念が既成宗教を離れて単なる心情倫理と化し、国家的価値の攻勢に無防備であったこと、学問的営みとしても国家（国体）－宗教間の矛盾相克に関する積極的考究を欠いたことや、宗派的教団宗教に批判的な宗教学が各教独自の自律的活動に抑制的に働いたことが巡っては国家宗教の台頭に寄与したという視点も重要である。明治 20 年代の新宗教論が国家主義運動となる傾きに警鐘を鳴らし、教育勅語の陥穽を見抜いた大西祝ら最初期の一部の学者を除き、御用学問となった帝大宗教学はその後の国家的過程から自らを根本的に引き離すことはできなかった。引き継がれたという自由討究の精神はその対象から国家を外し、国家に合しながら国家自体を普遍化する（普遍的総合宗教の日本出現を論じ、皇国精神を世界指導的な普遍精神とみなす）ことで矛盾に目をつぶることの方を選んだのである。